

古川神社の棟札

(梵字)

武運長久 天正六戌寅曆 地頭方花房助兵衛職秀殿
奉再建吉原庄日置大明神宮殿 一字成就候
国内安全 九月廿六日造立 領家方片山左馬助秀胤殿

これは、かつて日置神社といわれていた古川神社（古川）に伝わる棟札の表面に書かれている文字で、天正六年（一五七八）に社殿の再建にあたり、花房助兵衛職秀と片山左馬助秀胤が奉納したものであることがわかります。

年間（一五七〇―一五七三）頃には荒神山（津山市荒神山）に在城して近隣の諸城を次々と攻略し、鏡野町域でも枳形城（香々美）、西屋城（西屋）、沖構（沖）などを攻略しています。

花房職秀（のち職之）は、備前的大名・宇喜多氏に仕えた武勇に優れた武將で、宇喜多氏の主な合戦にはほとんど参加し、豊臣秀吉からも一目置かれた人物で、司馬遼太郎の小説の主人公にもなっています。元龜

当時の職秀の所領は各地にあり、鏡野町域では古川の五〇〇石をはじめ、中谷、久田、土居、西屋で七六〇石を領していた記録があります。一方の片山秀胤は、この地域を拠点とする国人（地侍）で、『美作古城史』には、毛利氏に属し、葛下城

（中谷）城主の中村頼宗に与してゐたとあります。

二人は宇喜多氏と毛利氏の家臣の間柄ですが、天正二年（一五七四）から天正七年は、両氏は同盟関係にありましたので、この地域が一時的に平穏であった時期に日置神社の再建が行われたことがうかがえます。

棟札のそれぞれの名前の上には「地頭方」「領家方」という肩書がありますが、これは鎌倉・室町時代の土地（荘園）の支配制度に基づくもので、「地頭」とは幕府から任命された荘園の管理者のこと、「領家」とは荘園の所有者のことです。当時

はこうした荘園制度は崩壊していたのですが、この棟札では大名（宇喜多氏）から支配権を任命された職秀に「地頭」、在地の国人である秀胤に「領家」という肩書をつけることで、お互いの立場の違いを明らかに

しつつ、地域での支配力の均衡を保とうと印象付けているようです。

ただ、この頃左馬助の子とされる片山木工助（奎之丞）は宇喜多氏に属し、院庄城（構城・津山市院庄）の守りを命じられていましたので、一族の存続を図ろうと親子で

両氏に属していた可能性も考えられます。しかし、同盟関係の破綻後は、天正九年（一五八一）に中村頼宗が宇喜多氏の岩屋城（津山市中北上）を奇襲する際に選抜した三二人の一人として左馬助が参加し、院庄城もこの頃毛利氏の手落ち、木工助も毛利方の武將として宇喜多方と対立したようです。しかし、天正十二年に両氏の和睦が成立して毛利氏が美作を退去すると、木工助は再び宇喜多家の家臣として四五〇石の知行を受け院庄城に在城し、関ヶ原の合戦後は戸嶋（津山市戸嶋）に帰農したと伝えられます。

また職秀の方は、文祿四年（一五九五）に主君の宇喜多秀家の怒りを買い、秀吉の仲介で常陸国（茨城県）の佐竹家に預けられますが、後に徳川家康に仕えて旗本となり、元和三年（一六一七）に死去しています。

古川神社の棟札は、こうした当時の美作国内における大名勢力と在地勢力の関係を推定する上で貴重な資料といえます。

参考資料：『鏡野町史』『作陽誌』『美作古城史』

『美作国の山城』『吉備地方文化研究』第十五号

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733



古川神社



棟札



院庄城跡